

。ときめきリーフノベル

## 自粛とワクチン

文・高安義郎  
絵・芝 章一

令和元年の暮れから流行し出したコロナウイルスによる流行性疾患は、一年程で世界中に広がり、令和三年の暮れには全世界で二億六千万人が罹患し死者も五百二十九万人を越えた。流行を抑える為、不要不急の外出を控え、自粛生活が余儀なくされた。多くの商店は休業に追い込まれ倒産する店も出てきた。

貞夫の勤める旅行会社もキャンセルが相次ぎ予定されていたツアーも中止になり、一年前からテレワークに切り替わった。

始めの内は通勤時間がないだけ楽な気がし、これまで気づかなかったアイデアで新しいツアーが浮かんんだり、案内のキャッチコピーを考えたりした。だがコロナ騒動の只中で旅行の案内はあまりにも似つかわしくない。そう思うとパソコンの前に座っているのも虚しくなり、やがてイライラするようになってきた。

そんなある日、高校時代趣味にしていたプラモデルの組み立てを久しぶりに手がけることにした。ところが作業場代わりになっていた奥の部屋は物置になっていて、段ボール箱が幾つも詰め込まれていて足の踏み場もない。常々妻も片付けたいと言っていたのを思い出し、妻と二人で片付けることにした。壊れ掛けたカラーボックスが四つ程出てきた。ボックスを解体しゴミ袋に詰め込んでいると、妻は、

「これはいらぬわよね」

「こんな物何にするのかしら」

「これも捨てていいわね」

自分の勝手な判断で次々に部屋の外に投げ出した。だが、それらは未完成のプラモデルであったり、学生時代の思い出の品だったりだ。

「それはいるんだよ」

「これはこれから組み立てるんだ」

貞夫は投げ出された物を一つずつ吟味するとまた棚に戻すのだが、妻はお構いなく放り投げってくる。思い出が次々に捨てられていくように思えたが、貞夫は黙ってダンボールに詰め込んだ。だがあまりにも妻が多量の物を捨てるので、とうとう癩癩(かたじけなく)を起こし、「みんな捨てたらいいんだろ」そう言い捨てると段ボール箱を三つほど外に放り出した。すると、

「それは私が小学生の時買って貰った

ピアノカよ。そっちの箱には結婚式の時に着たウエディングドレスが入ってるのよ」

そう言っ妻は憤慨(ふんがい)したように言った。

「俺の思い出はいらぬのに、自分の思い出は大事なのか」

貞夫は不愉快に思い怒鳴るように言った。

「プラモデルなんて子供のおもちゃじゃないの」妻の言葉に、

「ピアノカなんかもう吹かないだろ。それに二十年も昔のドレスなんかどうするんだ。また着る気なのか」

つい言葉を荒げた。

「そうよ。再婚する時に使うのよ」冗談のつもりで言った言葉が妙に真実みを帯びていた。

「いいわよ全部捨てればいいんだわ」

「ああ、捨てる捨てろ」

貞夫は腹立ち紛れに奥の棚にあったプラモデルや飾りケースをゴミ袋にたたき込んだ。すると妻も、

「私のも捨てればいいんでしょ」

そう言っ妻が昔趣味で作っていたパッチワークの壁掛けをゴミ袋に入れた。棚の奥から小箱が出てきた。それは大学生になった一人息子が幼稚園の頃に描いた絵や工作物だった。そこへ息子がやってきて言った。

「何を騒いでるのさ。二人で相手の思

い出にけちを付け合うのは止めなよ。自粛自粛でイライラするのは解るけど、みっともないじゃん。その箱の物は俺の子供の頃の物でしょ。そんなの捨てていいから」すると、

「これはお前の思い出というより親の思い出だ」

貞夫の言葉に妻も、

「そうよ。お母さんとお父さんの共通の思い出なんだから」

すると息子は言った。

「共通の思い出ならいいのかい。それなら連れ合いの作った思い出も大事にして、二人の思い出にすればいいじゃないかなあ」

呟(つぶや)くように言った。数分無言の時間が過ぎた。

「これ、まだ取っておくか」

貞夫はドレスの入った箱を棚に戻した。妻もプラモデルの箱を黙って棚に戻した。

「おやおや、俺のワクチンが効いたのかな。コロナのワクチンも早く欲しいよ。休校も飽きたし」

そんな事を呟(つぶや)きながら息子は部屋に戻って行った。

